

所有の人間学

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

戦後の高度経済成長とアメリカナイズされた生活様式の普及により、犬や猫といった生命体までもが所有・消費の対象とされている。今日、われわれは多くの商品に囲まれ、それを消費できるという“豊かさ”のなかで生活している。そして、持ちきれないほどの多くを所有しているにもかかわらず所有欲はいっこうにおさまらない。そして結局、自己中心的な所有と消費をくり返し社会や環境は崩壊への一途をたどっている。多くの商品を持つことが豊かさと感じている空しさ、お腹いっぱい食べながら太ることを心配するという矛盾。そんな不健全な社会にわれわれは生きている。

マハトマ・ガンディーは、世俗の地位や権力、財というものには、いっさい執着せず、生涯、無所有をとおした。彼は、「何ものをも所有しない、それゆえにすべてを所有する」と説いた。それは、欲望には限りがなく、無限の欲望は物質世界では満たすことができず、精神界でしか達成できないということなのではなかろうか。非暴力、不殺生というインド伝統思想にもとづくガンディーの行った反近代の実験、その実験のいたるところでみられる知と愛の精神、そして自分自身に課す徹底した欲望の制御は近代文明に汚染された現代人にとっては、到底真似のできないかけ離れたものである。しかしだからこそ彼は、人間の本心から発せられる声をとらえることができ、それを形に表わすことに成功したのではなかろうか。ガンディーと肝胆相照らした心友同士であった近代インドの偉大な詩人タゴールも、人間の進歩とはあくまで精神的なものでなければならず、真の文明や文化とはひたすら人間的なものでなければならぬと説いている。かつてわが国にも清貧という、貧しくとも精神的理想を生活の基礎とする文化があった。こうしたガンディーの自己制御や清貧の思想は、われわれが今、もっとも求めなければならないものではないだろうか。

本論文は、以上の問題意識に立って、愛と非暴力の実践者として有名な、あのガンディーの思想と行動から学ぶとともに、かつてわが国に確かな足跡をのこしてくれた文人たちの生き方からも学びつつ、いったいどうすれば所有欲を正しくコントロールし、人間として充実した生き方が可能となるのかを人間学的に探求したものである。